

2023「ことばの森教室」第2回優秀作品紹介

<小学校5年生> 作文課題「〇〇の手」

5-① 「守ってあげたい大切な手」

私には、9才年の離れた弟がいます。弟は、今2才になります。弟の手は8cmくらい、私の手は15cmくらいで、弟の手は小さくてとてもかわいいです。弟の手はモチモチしていて、まるでおまんじゅうみたいです。

弟は、自分の手を食べるのが大好きです。毎日親指をしゃぶっているので、弟の親指はシワシワです。他にも弟が好きなことがあります。それは、洗たく物をにぎって口に入れることです。弟は、自分の近くに置いてある洗たく物をつかむと、やってやったぜという感じの顔をします。その時の顔は、とてもニコニコしています。私は、自分で作った物をこわされたりするので、あまりいたずらをしてほしくありません。でも、いつもニコニコしているかわいい弟なので、ゆるしてあげています。弟は、みんなの手をかむのが好きです。手が近くにあると、手のところに来てかみます。かまれると、ものすごく痛いです。

弟は2才で、まだ小さい赤ちゃんなので、手だけじゃなく体全部を守ってあげたいです。まだ小さい手なので、ケガをしたらすごくいたいと思います。ケガをしないように、そばにいてあげたり、ケガをしそうになったら止めて、ケガをしないように助けてあげたいです。小さな手は、一つの命なので、大切に大切にあげたいです。

5-② 「根気強く」

お母さんの手は、カサカサしていてマメがある。大きさは、私の手より少し大きい。いつも手が温かい。

お母さんは、いつも家事をしている。よく皿洗いをしているところを見かける。時には手袋を着けている。家族の使った皿を、朝昼夜毎日洗っている。たまに、お父さんがやる時もあるけれど、ほぼ毎日お母さんがしている。だから手がカサカサしているのだと思う。

マメは、お母さんの趣味によるものだろう。お母さんはよく、勉強や編み物をしている。時間があれば、数学と韓国語を勉強している。私は、自主的に勉強するお母さんはすごいと思う。私は自分から進んで勉強はしないし、やったとしてもすぐあきらめてしまう。そんな私でも興味を引くものがあつた。それが「編み物」だ。4年生の時、お母さんがソファで編み物をしていて、楽しそうと思ったのだ。あきらめの早い私でも、自分からやってみようと思い、お母さんから教えてもらった。始めたすぐは、とても難しかったが、なれてくるとスイスイ編めた。一番最初に作ったのが、マフラーだ。冬につけると、この出来事を思い出す。今では、ぬいぐるみも編めるようになったが、お母さんと比べるとまだまだだ。

私の特技は絵を書くことだ。今度はもっと根気強くやって、お母さんに「上手だね。」と言ってもらいたい。

5-③ 「じっくり見てみた」

そう言えば、お父さんの手なんて3年生ぐらいからほとんどさわってないし、じっくりと見ることもなかったです。お父さんの手をじっくり見るのは、ちょっと恥ずかしいような気がしたけれど、久しぶりに見てみました。

久しぶりに見たお父さんの手は、とても大きくてまるで野球のグローブのようでした。よく見ると、爪の間に黒くなっていたので、お父さんに「何で、爪の間に黒いの？」と聞いたら、「仕事で油を使ったから

だよ。」と言いました。私はお父さん手は、ちょっとカッコいいなと思いました。私はお父さんの手と自分の手を比べてみました。そうしたら、お父さんの手は、私の手よりも大きくて、すごくぶ厚くて温かったです。

私は、お父さんの手ってすごいな—と思いました。なぜかという、あの大きくて太陽みたいな手で仕事をして、家族のことを守ってくれているんだな—と思ったからです。今まであんまり考えたことはなかったけれど、これからはお父さんに感謝の気持ちを持って、生活したいと思います。

5-④ 「手に隠された秘密」

私の父の手は、とても大きくて、とても色が濃くて、とても温かい。これだけではなくて、父の手には秘密が隠されている、と思った。

私はその秘密を予想して、その後に父に聞いてみることにした。私の予想は、「仕事」だと思う。父は、バイクに関わる仕事をしている。いつもバイクのハンドルを力強くにぎっている。家には、80台くらいのバイクがある。父は全てのバイクを大切にしている。父は、バイク以外にも車が好きな。特に、古い車が好きな。車は7台ある。父は、バイクと車の点検をしている。だから、車もバイクも壊れることがあまりない。父は、難しい部品の名前も全て覚えている。そして、使っている道具を整理し、作業しやすいように工夫している。毎月仕事を頑張っているのに、体調をくずさず、休んだことがない。私は素晴らしいと思った。

次に、父に聞いてみた。父は「仕事」と言っていた。なぜ、あきずに続けられるのだろう。父は、「バイクが好きでしている。ずっと続けたい。でも続けられないかもしれないから、今たくさんやっていたい。」と言っていた。私は父にこのようなことを聞いたことがない。そして、父と手をつないだ時に、父がいつも私にしてくれていることを思い出した。父の手は、とてもやさしかった。そして、父の心も見えた。父は、私のためにたくさんのことをしてってくれていることが分かった。

5-⑤ 「ありがとう」

お母さんの手は、いつもカサカサしていて血が出ているところもある。お母さんがやっていることは、皿洗い、洗濯物干し、ご飯も作っている。そして冬は特に、手がカサカサしていたそうだ。私の手と比べるとかわいそうだなと思う。

お母さんとの思い出は、一緒に料理をしたり、工作で色々な物を作ったこと。いつもありがとうという気持ちになる。日常生活は、外で仕事をしたり、家に帰ってきたら妹のことや私のことや家のこと、洗濯、ご飯作りもしている。私も皿洗いくらいはしているけれど、手もお母さんほどにはならないし、他のことを手伝ってもカサカサにもならない。何でだろう。

お母さんの手は、私にとって大切な手だ。お母さんがいなくなったら、私は生きていけないかもというくらい大切だ。学校のこと、家のこと、外のこと、全部やってもらっている。お母さんてすごいな。どうやってこんなにたくさんできるんだろう。

私はお母さんみたいな手にはなりたくない、初めは思っていたけれど、今は、頑張っている証拠だからなってもいいかなと思っている。まるで、温かく守られているようだ。でもお母さんにとっては、ざんこな雨が降っているように感じるかもしれない。痛みをがまんしながら頑張っているかもしれない。私にはその痛みが分からないけれど、私にとっては温かく見守られているように感じた。

5-⑥ 「自分にほこれるように」

「ありがとう。これからは、もっとがんばるよ。」冷たく小さなひいおばあちゃんの手をにぎりながら、ぼ

くはそう言いました。

ぼくのひいおばあちゃんは、ぼくを見ると入れ歯が飛び出そうなくらい口を横に開いて、笑顔で出迎えてくれました。そして、いつも、「がんばってるね。」と、ぼくの顔や手をずっとすりすりなでてくれました。その手はしわくちゃで、何本かの指にはばんそうこうが巻かれていました。少しくすぐったいけれど、やさしいぬくもりが広がって心地よかったです。

半年前に、99歳で天国に行ったひいおばあちゃんは、他人の悪口は決して言わないやさしい人でした。80年近く、弱音をはかずに子育てや家事、畑仕事を朝から晩までやってきました。一生懸命生きている人の手は、こうなるのだなと思いました。ぼくの手を見てみると、しわもきずもなく、ぷにぷにした団子のように。今まであまり苦勞もせず、本気で頑張ってきたと胸を張ってほこれるものもなかったかもしれません。

「人の人生は手を見たら分かる」という誰かの言葉の意味を、ひいおばあちゃんの手を見て納得できました。これから先の人生、ひいおばあちゃんに恥じないよう、自分自身に恥じないよう、何事にも努力していきたいです。そして、辛い時には、ひいおばあちゃん的笑容と手のぬくもりを思い出して、乗り越えたいです。

<小学校6年生> 作文課題「毎日の生活の中で心が動いたことを書こう」

6-① 「大切な鐘の音」

「ゴーン、ゴーン、ゴーン」と我が家の寺の鐘が鳴る。私が生まれる前から、鐘をついていたそうだ。今でも毎日3時間おきに5回ついているので、時間が近くなると、いつも時計をながめている。

今年約300年ぶりに鐘が変わった。新しい鐘は、時間になると自動についてくれるようになった。前は、もう時間が近くなると、3分前頃には鐘つき堂に入って居たり、用事で出かける時も鐘をつくの遅れないように時間を見ながら行動していた。このように、いつもいつも時間を気にしなければいけないので、落ち着くことができなかった。

一方、鐘が変わってからは、前のように急いで鐘つき堂に行くこともなくなった。忙しい時には、自動の鐘つき装置に設定している。前のように時間にしばられることなく、時間を有効に使えるようになった。機械でつく時は、時間ピッタリで、つき初めと同じ間隔でついてくれる。本当にいい音色だなと感じている。しかし、手動で家族が打つ時は、時間より早かったり遅かったりする。打つ間隔も人によって違う。だけど、家族一人ひとりの性格が表れているように感じる。

私は、手動も自動の音色も好きだ。夕方6時の鐘を聞くと、「今日も終わりだなあ。ありがとう。明日も頑張ろう」と思う。鐘は、私の気持ちを変えてくれるスイッチの一つになっていると思う。

6-② 「四人目のいとこ」

「こんにちは。おじゃまします。」私と弟は、大きな声であいさつをした。東京に住んでいるいとこの家に赤ちゃんが生まれたので、家族で会いに行った。いとこは三人姉妹で、一番上の子は小学二年生だ。久しぶりに会えて、私は心がはずんでいた。

私の弟と一番上のいとこは同じ年だ。弟が生まれた時は、よく世話をしていた。いとこのお母さんに、「抱っこしてみる？生まれて一ヶ月だから、人見知りも何もないから大丈夫だよ。」と言われたけれど、知らない人からさわられると泣いてしまいそうだったので、私は断った。お父さんとお母さんは、抱っこをしていたけれど、赤ちゃんは泣いていなかった。優しく抱いていて、「手足がデラぶどうみたいにぷっくり

していて、とてもかわいいね。」と言っていた。私はそれを見て、上手に抱いていてすごいなと思った。赤ちゃんは、ミルクみたいな甘い匂いがして、赤ちゃんにしかない、いい匂いだった。お腹がすいたのか、おむつを替えてほしいのか分からないけれど、突然赤ちゃんが顔を真っ赤にして大きな声で「オギャー、オギャー。」と泣き出して、声の大きさにびっくりした。

赤ちゃんには、周りの人を笑顔にして、いやしてくれる力がある。存在感が強く、家族から守られていた。私も小さかった頃は、みんなから大事にされていたんだなと思った。赤ちゃんが元気に育ってほしい。

6-③ 「最高の回転寿司」

「なんて美味しいんだろう。」大トロサーモンを食べて、ぼくは思った。注文してすぐ、目の前に来た大トロサーモンは、とても美味しそうで、しょう油を付けて一口で食べると、予想通り美味しかった。食べてすぐに、もっと食べたい気持ちになった。

ぼくは回転寿司が大好きだ。元もと刺身が大好きだけれど、ご飯と刺身を食べるより、お寿司として食べる方が好きだ。寿司の中でも、色が鮮やかでやわらかい大トロサーモン、つぶつぶしている楽しい食感のイクラ、最近食べられるようになったエビをよく食べる。寿司ではないけれど、カリカリのフライドポテトが食べられたり、シュワシュワのメロンソーダに甘い香りのするバニラアイスがのったメロンソーダフロートが飲めるのも、回転寿司のいいところだ。弟も寿司が好きで、行くと競うようにたくさん食べるので、親には「しっかりかんで食べなさい。」と言われる。

本当は、1週間に1回ぐらい行きたいけれど、あきてしまうと感動も薄くなると思うので、1ヶ月に1回ぐらいがいい。次に行く時は、まだ食べたことのないタコやイカを食べたい。ぼくにとって、回転寿司はお腹が一杯になって、楽しくなれる特別な場所だ。

6-④ 「丸いエメラルド」

「やっとできた！」僕は小さな緑色の球を見て、目を輝かせた。そこには、まだ2cmくらいの小さなスイカが実っている。僕は小さくても、別に良かった。

このスイカの実がなるまでには、たくさんの時間と労力がかかった。5月頃に苗を植えてから、実がなるまで約2ヶ月。そこから実が食べられるほどに大きく成長するには、更に1ヶ月ほどかかる。その間、植えて水をやり肥料をまき、わらを敷き害虫をとって……。実ができるまでには本当に大変だ。実をつけた時、おばあちゃんと「今年もちゃんと実がなったね。」「早く大きくなるといいね。」などと話をした。スイカは食べられるくらいに大きくなった時よりも、実ができた時の方がいい。

よく見ると、スイカが他にもいくつかなっている。「1, 2, 3, 4, 5……。」たくさんなっていた。実の数の分、気持ちも倍増する。僕は、その場でスイカを踏まないよう飛び跳ねた。本当はもっと飛び跳ねたかったけれど、スイカを踏んだら大変なことになるからやめた。急いでおばあちゃんに報告した。おばあちゃんもニコニコしていて喜んでた。今年はスイカをたくさん食べようと思う。

6-⑤ 「夜、僕に起きた恐ろしい話」

夜、僕は面白くて我慢ができなくて、いつもベッドで寝る前にユーチューブを見ている。今日も我慢できなくて、見てしまった。そして見た後、今日の疲れを取るため、一人でベッドに寝転んで眠ろうとした。そして数分が経った頃、ベッドの下からなぜか音がなった。その音で、僕の体全体に音が響いた。音が僕に響いた瞬間、僕の体はピタリと止まって、息も止まってしまった。

僕は、ベッドの下に誰かがいると思った。ベッドの下が気になって、頭を下げて見ようとした。けれど、「もし本当に誰かが居たら、それこそどうしよう。」と思って、そのことをずっと考え続けて、気がつくまで10分くらい経っていた。そして、僕は見るという決意をした。おそるおそる動いて見ようとする、またベッドの下から音がした。僕が動くたびに音がする。僕は「もしかして…」と思い、その踏んだところを手で押してみたら音が鳴った。

その時、僕は確信した。その音は、ベッドがギシギシ鳴る音だった。つまり、僕をビクビクさせていたのは自分だった。「何だか無駄な時間を過ごしてしまったな～」と、がっかりした。でも、原因が分かり、ようやく眠りにつくことができた。

6-⑥

「彼らから伝わってきた思い」

「色々な個性を持ったペンギン達だね。」「6年生みたいに、みな自由だな。」そんな話をしながら私達は、ペンギンの行進を見た。餌につられて出てきたり、途中で止まって動かなかったり、餌を取り合ったりと、幸せそうなペンギンがたくさんいた。シロイルカやセイウチもきれいなパフォーマンスを見せてくれた。印象に残る時間、そして、笑顔にさせてもらえる時間だった。

今年5月に、修学旅行に行った時の一場面だ。私達6年生、はコロナ明けで2泊3日の修学旅行に行くことができた。八景島シーパラダイスに行った時、多くの動物と触れ合った。近くでショーを見られるようにと、先生が先に席を取ってくれて、最前列でショーを見ることができた。すごく迫力があり、クラス全員で見たショーを今でも思い出す。行進を見た時、私はペンギンの背中に触った。ぬいぐるみのようにふさふさしていると思っていたが、実際は少しかためで驚いた。彼らは、人間を全く気にせず、餌をもらいたいが為に必死で歩いているように見えた。

コロナ禍で制限も多くあり、生活がしづらかった。しかし、それは私達だけではなかったと思った。彼らも同じように、大変な思いをしてきたのだろうと感じた。彼らがパフォーマンスをしていた時、一生懸命だが、楽しそうに見えた。だから、私達も楽しくショーを見られた。彼らの思いも私達に伝わってくるのだなと、感じた。

6-⑦

「今うれしく思う事」

私は作文があまり得意ではない。そこで5年生になった時、町が主催している、作文を得意にする通信講座「ことばの森教室」に申し込みを決めた。最初に作文課題が届き、与えられたお題について書いていく。思いついたことをたくさんの言葉にして、なるべく最後の行まで書ききる。それだけの思いで、提出してみた。

数日後、自分の書いた作文が戻ってきた。中を見てみると、たくさんのアドバイスが書かれていた。次のお題が来て、私はおばあちゃんのことについて、前回のアドバイスを参考にして書いた。すると、その作文が良い評価を受けて、新聞に載せてもらうことができた。

ある日、学校の帰り道、近所の人に声をかけられた。「新聞の作文見たよ。すごいね。この作文を見たら、おばあちゃんが喜ぶね。」と言ってくれた。そして、また次のお題が来る。だんだん私は、作文を書くことが楽しくなってきた。ある時、また学校の帰り道、先日声をかけてくれた近所の人が、「あの作文がとても良いから、切り抜いて取ってあるよ。久しぶりにおばあちゃんに会いたくなってきたよ。」と言ってくれた。おばあちゃんは、今老人ホームにいて、いつか会える時に作文を見せようと思う。

作文が苦手だった私が、ことばの森教室を通して、読む人に自分の気持ちを伝えることができたこと、そして感動してもらえる作文が書けるようになったことが、今とてもうれしい。

6-⑧

「まほうの言葉」

先日、ショッピングモールに家族と行った。そしてトイレに行った。しかし、とても並んでいて、時間がかかった。並んで待っていると、私の前に並んでいた小さい女の子が、「もう、ダメ〜。」とお母さんに言っていた。お母さんは、とても困っていた。すると、女の子の前に並んでいたお婆さんが、「先、どうぞ。」と列を譲っていた。女の子のお母さんは、「良いのですか。ありがとうございます。」と笑顔になっていた。私は、心が温まった。私だったら、見て見ぬふりをして、譲ってあげなかったと思った。列を譲ったお婆さんは、自分だけでなく周りの人のことも気にかけてくれていた。

私は、知らない人に声をかけるのが苦手だ。しかし、勇気を出して、一言かけられれば、相手は笑顔になってくれる。断られてもきっと、相手はうれしくなると思った。

なかなか言えない一言は、相手を笑顔にさせる力がある。「やらずに後悔するより、やって後悔した方がいい」という言葉があるように、何事も挑戦することが大切だと改めて感じた。また、言葉の力はすごい。だから、その言葉を正しく操れる人間に私はなりたい。そのために、普段から色々な人とコミュニケーションを取ったり、交流をして、自分の気持ちを相手に伝えられるようになりたい。

6-⑨

「自分が協力できることは・・・」

「ただいまー。」いつも通りに学校から帰ってくると、それまで入院していたおばあちゃんの姿があった。おばあちゃんは、去年のお盆に突然の病で入院していた。ベッドに寝たきりだったけれど、私は涙が止まらなかった。

私のおばあちゃんが入院していた時は、コロナも影響で直接会って面会ができなかった。でも、オンラインでなら面会ができた。オンラインで面会をしていると、おばあちゃんが元気そうで、私はほっとした。しかし、お母さんから「おばあちゃんの病気が悪化した。」と連絡があった。2月になって、このまま入院していてもコロナで面会ができず、ずっと家族に会えなくなるからと、おばあちゃんが家に帰ってくることになったのだ。そこから介護の生活が始まった。介護は、何もかもが初めてのことで、世話をしているお母さん達も教えてもらったり、実際に見たりしながら、どうやるのか探っていた。私もやり方を覚えていくと、細かいことが少し雑になっていることに気がついた。お母さんにも「介護は絶対に気を抜いてはいけない。」と言われた。そして私は、介護はおばあちゃんが少しでも長く生きられるように、みんなができることをやっていくんだと思う。

在宅介護とは、今までの生活とがらっと変わってしまう。けれど、介護という貴重な体験ができることを大切に、おばあちゃんが快適に過ごせるように協力したい。

6-⑩

「じいじがたおれた」

今年の7月、じいじが河口湖でたおれた。その話を聞いた時に、すごく不安になった。キャンプをしている時に、酔っぱらって倒れ、低体温症になってしまい、手足が動かなくなった。お見舞いには行けなかったが、電話で元気なのは分かったから少し安心した。

このことでママは、家を空けることが少しだが多くなった。私は、家事をやる機会が増えた。皿の洗いや物をしたり、洗濯物や自分から進んでやるようになった。その後、少しじいじの容態が落ち着いたので、ママはいつもの生活に戻った。けれども、休んだ分の仕事を取り返すために、帰ってくるのが9時くらいになった。すごく不安だった。じいじの次は、ママが倒れてしまうんじゃないかと、すごく怖かった。そこで、私はママを支えるために何かできることはないかと考えた。それが「家事」だ。私は、前よりももっと家のことをすることにした。

ある日、じいじが東京の病院へ移動することになった。また不安になった。ママに聞いたら「もっと効率

よく治すためにいっただけだから、心配はない。」と言われたが、不安は消えなかった。

今でも不安はあるが、私はこのことで、改めてわかったことがある。やれることは、すぐにやっておくということ。それを心に入れながら生活していきたい。